

# 下関のシベリア出兵と宇部の米騒動、一九一八年八月

井 竿 富 雄

Tomio IZAO

はじめに

- 一 下関のシベリア出兵
- 二 宇部の米騒動
- 三 差別と美談―事態の收拾  
小括

## はじめに

シベリア出兵の開始は、一九一八年八月である。このことは、しばしば「米騒動」と同時に想起される。これらの事件が、特にシベリア出兵に動員された地域の場合、どのように関連して展開されたか。これが、この論文の関心となる事項である。

シベリア出兵も、米騒動も、極めて大きな政治的事件である。それぞれを取り上げて研究を始めるだけでもかなりの困難が伴う。筆者はシベリア出兵の側からこの問題を一度取り上げたことがあるが、さほど成功したと思えない。それぞれの事件は、同時並行的に一つの街で発生するのだが、統一的に描き出すのがきわめて困難だからである。

本論文では、シベリア出兵発動直後に小倉第一二師団の一員として動員された山口県下関市の様子と、労働争議、米騒動、そしてシベリ

ア出兵が重なってしまった宇部村の二つの事例を取り上げ、シベリア出兵の発動の中で、これら二つの事件がいかに展開し、どのように收拾されたかを見ていきたいと考えている。

本論文では、主として当時の新聞が史料として用いられる。新聞が必ずしも事実を客観的に報道しているわけではないことは筆者も了解している。しかしここでは、誤報・偏見も含めて、同時代的な認識の一つとして取り上げる方法を採用した。後述するように、異なる党派を支持する新聞が、全く同一の偏見に基いている報道をすることがあった。これなどは、明らかに歴史の側面としてとらえられるものである。方法的な部分で、メディア研究の専門家から、教示を請いたいところである。

## 一 下関のシベリア出兵

一九一八年八月二日、寺内内閣はシベリア出兵宣言を発した。最初に動員を命じられた中に、第一二師団があった。司令部は小倉に置かれていた。この師団が人員を集める区域としては、福岡県、大分県や熊本県の一部とともに、山口県の西部地域があった。下関市と厚狭郡、豊浦郡である。

このうち、中心となったのは、当時県下唯一の「市」だった下関市であった。当時下関市は人口六六〇〇〇人あまりを抱えた大都市だった。下関市では、三種類の新聞が発刊されていたが、そのうち筆者は『関門日日新聞』（憲政会系）『馬関毎日新聞』（政友会系）を参照することができた。<sup>(2)</sup>これらの新聞史料から、下関のシベリア出兵、そして米騒動前後までをまず本節では見ていくことにしたい。

国際的な港湾都市、ということもあってか、下関の新聞には、早くからロシア関係の記事がよく掲載されていた。特に『馬関毎日新聞』は、毎日のようにシベリア関係の情報を掲載していた。日本人居留民がポリシェヴィキ軍と戦闘を交えて、大量に死傷者を出した「ブラゴベシチェンスク三月事件」においては、すぐに犠牲者の氏名と本籍を掲載した。<sup>(3)</sup>「特置員」という署名のある記事が散見される。同紙は後に後年極東共和国を率いるクラスノシチョーコフとの会見記すら掲載するに到った。<sup>(4)</sup>また、『関門日日新聞』は、下関港に上陸する内外人からのインタビュ、いわゆる「帰国談」を頻繁に掲載した。登場する中には、かなりシベリア出兵で重要な役割を果たしていた人物もあった。<sup>(5)</sup>ただ、党派は異にするものの、両紙ともに出兵に対する立場は「自主的出兵論」であった。その論拠はさまざまであったが、「独逸東漸論」、あるいは人道救援論が用いられている。『馬関毎日新聞』は「独逸の東漸を防遏し依つて以て東亜永遠の平和を擁護し且つは通商貿易の発展隆昌を策する」、そして「聯合興国との盟約を遂行し更に延て露国民将来の幸福をも図らんとするに存すべきこと」が、日本の出兵の目的なのだ<sup>(6)</sup>と主張した。また、『関門日日新聞』は、亡命ロシア人がインタビュで、日本の救援軍が待たれていると話した記事を論拠にして、このような発言を聞いて出兵しないのは「冷酷無情」である、と書いた。同紙によると、このような出兵は日本の利害のためではない。ポリシェヴィキによつて財産を破壊されているロシア人を救援するの

は、「これ即ち世界の文明を護り、正義人道を維持する所以に非ずや」ということになるのであった。<sup>(7)</sup>政友会系の『馬関毎日新聞』でも、経済的なリスクから出兵に反対する議論は「是れ全く苟且儉安財政の方面のみを見て、国家問題を閑却したるもの也」<sup>(8)</sup>と強硬な主張をしていた。また、『関門日日新聞』は、六月に早くもチェコ軍を紹介する社説を掲載している。<sup>(9)</sup>この社説では、チェコ軍に対し、日本は「聯合國と共同し之に適當の援助を与へ、その志を遂げしめざる可からず」と書いていた。チェコ軍を出兵宣言の二ヶ月も前に紹介し、独立運動に協力すべきだと書いた社説は注目に値する。

また、下関は、他の地域以上にシベリア出兵を意識しなければならぬ事件に直面した。一九一八年七月二六日夜、下関駅で国外に積み出されていた軍事用の火薬が爆発し、多数の死傷者を出したのである。下関市は緊急の市会を招集して陸軍側に抗議し、あわせて市内の新聞社は被害者に対する義捐金の呼びかけなどを行っている。<sup>(10)</sup>

このように、下関においては、出兵論のバイアスがかかっているものではあっても、相当量豊富な情報を得ることができていた。そのよ

うな中で下関市は、一九一八年八月二日の出兵宣言を迎えた。下関市の様子は、出兵後はきわめて厳重な検閲がかかるため、報道ではあまりよく分からない。また、市の行政文書を参考にすることがまだできていないので、市当局の動きが明快になってはいない。ただ、報道の中からだけでも、いくらかの片鱗を探り出すことはできると考えられる。

新聞には、出征の見送りをする人々の写真が多く掲載されるようになった。<sup>(11)</sup>通常八〇枚程度しか一日に売れない関門連絡船のチケットが五五〇枚も売れたという<sup>(12)</sup>光景の記事の近くには、千人針を刺す女性の写真が載った。そして、社会面には、出兵の背後に隠れた問題が現れるようになった。働き手の出征による家族の困窮であった。

出征者には、病床の家族や、産後の妻子を置いて出征しなければならぬなどという者もあった。召集を受けた男性が「私は子供が四人あり妻は本月臨月なので入隊後の家庭が心配ですから役場の方へお願ひしても取合ってくれませぬから宜しく頼みます」と懇願したなどという記事も見られる<sup>(13)</sup>。次の節で触れる宇部村においては、夫の出征が決まったため、妻が子供を捨てて出奔したなどという事件すらあった。出征によって暮らしが立たなくなるのを恐れたためである<sup>(14)</sup>。留守一二師団長となった仙波太郎中将はこの問題で新聞のインタビューに応じていた。この中で仙波師団長は、次のように語った。すなわち、出征軍人の家族の半数は生活に窮しているのではないかと思う。軍事救護法はあるが、全員を救済できるわけではない。それに「米が五十銭近くする今日ですから何の役にも立ちますまい」。新聞にも力を貸してほしい。「物質上のことに至りては是非共自治体の力を藉らなくてはなりません、其自治体を動かすには新聞の力を是非共藉らなくてはなりません」。米を中心とした物価の上昇は、出征軍人に「後顧の憂い」を生ずるものだったのである<sup>(15)</sup>。これを象徴する事件が、対岸の九州小倉で発生した。出征する息子の心労を減らすため、病気の父親が自殺したのである<sup>(16)</sup>。この事件は、米騒動後今一度想起されることになる。

逆に、出征する人を支える体制にも問題が生じていた。まずは出征兵士が発するまでの宿営の問題であった。宿営は一般市民の住宅を借りるのだが、これに応じようとしていない人がいたのである。兵士の宿営を割り当てられた人の中には、高価な食材を整えて歓迎する人もあった。しかし反面、「病人がいる」「部屋は人に貸している」などの口実を設けて、宿営に応じようとしていない人がいた。新聞は「こんな人に限り給水量のことで取調べに行く私の内はほんの少数で雇人や職工は皆他に家を借りますなどと水道料金を胡魔化さんとする奴等」だと憤っている。しかも、中流以上の市民に宿営を拒絶する人が多い、

と書かれていた。このようなことは他の地域でもみられる<sup>(17)</sup>。

前述のように、軍隊側は新聞に、世論の動員力を期待している部分があった。ところが、新聞は戦時下では検閲などの統制があった。この部分で、末端で矛盾が生じていた。一二師団側は、比較的報道陣に對して、情報をできるだけ公開すべく対応していたようである。ところが、反面東京の中央政府からは、次々とシベリア出兵に關して「掲載禁止事項」への指示が来た。この時期の報道によくある、検閲部分を○に置きかえたり、周囲の状況を細かく書き込むことで読者に事実を察知させる手法も、命令で禁じられた。『馬関毎日新聞』は、記事差し止め命令の全文まで掲載して、一二師団の対応と政府側の対応の矛盾を非難する記事を掲載した<sup>(18)</sup>。

このように、一部不具合を生じつつも、対岸の小倉や門司と同様に、シベリア出兵は進められていたように見えた。だが、米の価格は、この間も著しい上昇を示していた。『関門日日新聞』は、下関市内の米穀商が、「この有様で行けば米価はどれ位騰るか底が知れぬので富山県の二の舞を演ずるやうなことになるはせぬかと気遣はれる」と話していたことを伝えている<sup>(19)</sup>。一九一八年七月以来、富山県で繰り返し起こっていた地域的な米騒動が拡大の可能性を見せはじめた。また、陸軍がシベリア出兵用の米を山口県内で買い集めているために米価が上がるのだという噂が飛んでいた。陸軍当局は「陸軍に於ては軍用米を同地方に於て買入れたるは事実なるも米価に影響するが如き無法なる買占めは行かざ(ママ)」と、新聞報道を通じてこの噂を否定しなければならなかった<sup>(20)</sup>。

山口県の警察当局は、米価高騰の中で人々の生活が窮迫していることを正確に察知していた。人々は嗜好品を止めた。衣服を買わなくなった。中産層も、夜ひそかに米屋に外米を買いに出た。一日二食に食事を減らし、さらに米の消費を減らすために雑炊や粥にして食べた<sup>(21)</sup>。

戦時景気で給与も上がっていたが、米の価格暴騰に追いつかなかつたのである。まして働き手を出兵で失う家庭にとつては、米価の高騰は生命維持の危機であつたであろう。既に、全国各地で米騒動は広がり始めていた。

下関では、八月一四日より、地元新聞三社が合同で米の廉売に乗り出した。醸金者と募金額を新聞に掲載することを条件に義捐金を募集した。<sup>(22)</sup>しかし、新聞自身は決して米騒動に同情的ではなかつた。同日の『馬関毎日新聞』のコラムは「警戒の軍隊と衝突するやうになつては最早彼等暴民に同情す可き何も無くなつた」と書いている。<sup>(23)</sup>無秩序な「暴民」という決めつけが既になされている。既に県東部地域で米騒動が動き出していたからであつた。

だが、この山口県唯一の都市下関市で、米騒動は未だに終わつた(理由は後述する)。同じ時期にシベリア出兵の兵士を出した地域でも、厚狭郡宇部村で、全国的に見ても凄惨な米騒動が勃発することになつたのである。次の節では、この宇部村の米騒動とシベリア出兵とのかわりについて、経過を見ながら考察したい。

## 二 宇部の米騒動

宇部村は当時、厚狭郡に属した。宇部村の行政区域は現在の宇部市より狭かつた。村内は、海岸の炭鉱地帯、そして商店などが建ち並ぶ新川地区(現在も中心街である)、さらに背後の農村地帯に分けることができた。人口は既に三五〇〇〇人を数えていた(県都山口町よりも多かつた)。

ここで起きた、全国的に見ても最も激しいものと考えられる米騒動については、いくつか研究がある。最初に体系的に出たものは、大著『米騒動の研究』<sup>(24)</sup>である。これ以前から出ていたものに、郷土史家、

高野義祐氏の著作がある。高野氏は一九五〇年代、聞き書きや自身の記憶、さらに当時見ることのできた文献を中心として著作を残している。<sup>(25)</sup>一九八四年には、日野綏彦氏が新しい研究を発表した。当時宇部村で発行されていた新聞『宇部時報』が閲覧可能になつたこと、また『山口県警察史』という取締る側の歴史が公刊されたことが、この研究を可能にした。<sup>(26)</sup>このような研究の蓄積をもとにして、『宇部市史』も書かれている。<sup>(27)</sup>

筆者はこのような研究を参考にし、あわせて前述の日野氏の研究でも用いられた『宇部時報』紙を主として利用して、宇部の米騒動と初期シベリア出兵の発動との関連を考えてみたい。新事実や新史料はないが、関連を再構築するのが目的である。

シベリア出兵宣言前夜から、宇部でも不穏な空気があつた。『宇部時報』紙が七月に掲載した以下のような文章がある。「西洋では戦争があつて毎日何千人と云ふ人が死ぬるげな、露西亞では天子様が殺されたげな、物価はドシドシ貴くなるいくら儲が宜てもまごまごすると親も子も飢へ死だ隣家の息子は親父が鉱山で儲けたとかで此頃は馬関へ遊びに行つたで一週間も戻らぬげな、今に見るナンダあの野郎」稲葉を払らふ夕風涼しき夕顔棚の下から洩れるものは実に此の如き声ばかりである、驕慢、怨嗟、嫉妬、不安、疑惧の声は平静なる田舎の空気に工場の煙と共に拡がりつつある。<sup>(28)</sup>村内の経済格差が生み出す人々の不満がゆつくりと拡大することへの、極度の不安感が見て取れる。ロシアの革命が同時に言及されていることは象徴的なものだろう。

既に、八月初旬で、「金一升米一升」とまで書かれるほど、米が高価なものになつていた。だが、『宇部時報』紙は、この問題にさほど注意を払っていない。「国民の調節は米を食ふことを減して他に食物を得ることだ」などという対策しか書いていなかった。<sup>(29)</sup>どちらかといえは「生活の心構え」を説くという色彩が強い。同紙の創刊者が、宇部の実力

者の一人であった紀藤閑之介（のちに宇部市長を務める）であったことも関係するだろう。だからこそ、米騒動が他県で勃発したというときに同紙は「米価騰貴に伴ふ生活難は動もすれば社会の一部に険悪なる思想を生ぜんとす」と書き、労働争議が触発されるのではないかという危惧を表明した。<sup>(30)</sup>

逆に、シベリア出兵については、『宇部時報』は戦後の経済競争へ向けた体制作りの起爆剤として歓迎した。「出兵の断行は或意味に於ける自国の救済」である、と同紙は主張した。それは、シベリア出兵での日本の能力発揮が、「戦後の世界的経済戦に勝利者たるの資格を驗定する所以」だからであった。いわゆる、政治経済体制を、軍事的な緊張のもとで改編するという出兵論の一種である。<sup>(31)</sup>しかし、「思ふに此度の戦（シベリア出兵のこと―井竿）は其目的固より明かなりと雖も、對抗者の判然たらざるに依り、何となく士気の緊張を欠くものなきに非ず」ということも、反面同紙は認めていた。そうしながらも『宇部時報』は、宇部新川駅での見送りの光景を報しながら、「今日の戦争は軍人のみが負ふ可きものでない」「今日の場合安逸徒食は絶対に許さぬ」と書いていた。

とはいえ、宇部村の当局や、当時村政を一手に掌握していた炭鉱主・元土族などの組織「宇部共同義会」などが状況に無為無策だったのではない。「宇部共同義会」は、出兵者の家族には、大人一日二〇銭、子供一日一〇銭を給することを決めていた。<sup>(32)</sup>政府側も対策を取っていた。まず、天皇から総額三〇〇万円の下賜金が出た。山口県には五二〇〇〇円が割り当てられた。<sup>(35)</sup>これを受けて、宇部村でも、藤田権九郎宇部村長、北川嘉七船木警察署宇部分署長、そして地元銀行や炭鉱経営者が会議を開き、八月一七日からの販売を決めた。しかし、八月一七日夕刻、渡邊祐策（衆議院議員、のちの宇部興産創設者）の経営する炭鉱の坑夫が蜂起したのである。<sup>(36)</sup>坑夫は八月初旬から賃金をめぐって交

渉していた。<sup>(37)</sup>既に坑夫たちは新聞報道で各地の米騒動を知っていた。一部の交渉に警察が干渉したことが発端となり、直接行動へと向かったのである。<sup>(38)</sup>

坑夫たちは渡邊祐策らの自宅を襲撃して破壊した。調度品をすべて破壊され、布団を川に放り込まれた炭鉱主もいた。坑夫はさらに商店の建ち並ぶ新川地区へなだれ込み、商店を破壊して食料・衣料品を奪った。遊廓は徹底的な破壊の対象になり、建物は放火により全焼した。坑夫が市街地を焼き払うという流言が飛び、「市中は鼎の沸くが如く荷物を荷馬車や大八車に積んで避難するもの子を背負ひたる親が荷物を引揚げ命からがらで避難するものその様実に戦場の如く」という大混乱に陥った。警察力では治安維持が不可能と判断した藤田宇部村長は山口の四二連隊へ出兵を要請した。この時点では他の炭鉱にも動きが波及していた。<sup>(39)</sup>このときの坑夫側の行動には統制が取れていた。まず、人を殺害していない。また、民家を襲撃することもあったため、各民家は食事を家の前に置いていた。だが、「出征軍人の家」と書かれた家の食物はどこからともなく取ることを禁ずる声が上がっていた。<sup>(40)</sup>

死傷者を出したのは鎮圧側だった。軍隊は八月一八日夜、逮捕された同僚の奪還に集結した坑夫たちへ発砲したのである。これにより一人が死亡した。死体は未明まで道路に放置された。翌日役場の手で仮埋葬されたが、遺体の首は地上に出して埋めてあったといわれる。<sup>(41)</sup>

この後に来たのは、大量逮捕、そして事態收拾のための諸措置であった。最後の節ではこのことを扱いたい。

### 三 差別と美談―事態の收拾

米騒動は山口県でも強烈な打撃を当局者に与えた。県都山口町で米騒動が未発に終わったのは、警察力で徹底的に押え込んだからである。

また、下関市の場合には、警察力とともに、前述の新聞社合同の廉売が効を奏したといわれる。<sup>42)</sup> 西金蔵下関警察署長は「余は余の部下とともに最善の努力を為しつつあるから市民諸君はどうか吾々警察官を信頼して流言蜚語に迷はさるが如き事のない様にして貰ひたいものだ」と新聞を通じて市民に呼びかけた。<sup>43)</sup> 中川望山口県知事は、県下の消防団、在郷軍人会、青年団に治安維持のため出動する旨訓令を發した。<sup>44)</sup> 県下警察官の八割が、米騒動対策に動員された。<sup>45)</sup> 県都山口を擁する吉敷郡長柏村唯雄は、管区町村に人心安定策を講ずるよう命じた。<sup>46)</sup> 宇部では一八〇〇人以上が逮捕された。<sup>47)</sup> そのため炭鉱では労働力が不足し、石炭が掘れなくなった。<sup>48)</sup> 曖昧にしか書かれなかったが、在郷軍人の米騒動参加も知られていた。<sup>48)</sup>

新聞自身、そして県当局者は宇部の米騒動に猛烈な罵声を浴びせた。紀伊寛平山口県警察部長は「彼等は全て人間にあらず」と言い切った。そして、資本家を襲撃したのは「現代最も恐るべき社会主義者の行動に彷彿す」と述べた。<sup>49)</sup> 『馬関毎日新聞』は「今や我帝国は西比利亜出兵を敢てし、世を挙げて経国の大業を翼賛す可(ママ)の秋」にもかかわらず民衆は騒動を起こした、という認識を示し、「吾人断じて彼らを寛容す可き所以を知らず」と、容赦ない処罰を要求した。<sup>50)</sup> 『関門日日新聞』は、このような騒動は中国で起こるもので、日本であるべきでない、と書いた。<sup>51)</sup> 『宇部時報』は、軍隊の発砲を「この銃声こそは宇部全村の生命財産を保護したのみならず、附近各町村の暴動を未発に防ぎたる最も有効なものであった」と全面的に支持した。<sup>52)</sup>

そしてその後が続いたのは、米騒動の原因に関する、偏見がむきだしになった陰謀説であった。特に『馬関毎日新聞』は、被差別部落住民の煽動説(これは全国的な陰謀説だった)を主張した。<sup>53)</sup> 『宇部時報』は、大新聞煽動説や、門司からの煽動者潜入説を載せた。<sup>53)</sup> その後、同紙は坑夫への取締り強化を主張する論文を掲載した。これには、市街

地、農村部、そして移住者が多い炭鉱地区という性格の違う地域で構成された宇部自身の対立の構図がある。<sup>54)</sup>

ただし、米騒動は、寺内内閣の打ち出した「対ロシア援助」政策への懸念となったことも確かだった。<sup>55)</sup> 『関門日日新聞』は、援助自体は賛成したものの、援助による日本の物価高騰などが起これば「他を救はんが為めに我国民は却つて困難を感じるなしと言ふ可らず」と書いた。<sup>56)</sup> 無論、救済策は取られていた。政府は天皇からの下賜金とともに、施米券と米の廉売券を自治体に配布した。下関では、不破彦彦市長名で天皇への感謝を捧げた。だが、新聞は一齐にこの米を受け取るべきでないという主張で筆を揃えた。下関の新聞は、豊浦郡川中村(現下関市)の村民が施米・廉売券を受けないことを称賛した。それは「アノ家はお救ひを受けたと村民から指さしをされるので一生頭が上らぬばかりか孫子の末まで家の名折れになる」からであった。<sup>56)</sup> 宇部でも地元資本家などが五〇〇〇〇円以上の寄付金を一気に集めた。だが、『宇部時報』は「宇部の如き労働賃銀の貴き所にては労働者と雖もその必要に迫らるる者は極めて少数であらう」として、労働者が施策を受けないように論じた。<sup>57)</sup>

それでも宇部の場合、事態は深刻だった。九月に開かれた「宇部教育会」では、逮捕者の子女への処遇、そして、児童から米騒動の記憶を取り去る方法が論じられた。<sup>58)</sup> 炭鉱側は矢継ぎ早に対策を講じた。渡邊祐策らは翌年までに労働者組織「労役者救済会」と修養団体「報徳会」そして「在郷軍人会」を同時に整備した。<sup>59)</sup> 「労役者救済会」発会のとき、渡邊祐策は政治家としてのハードスケジュールをぬって宇部に現れ、「斃れて後止む底の緊張振り」を見せたという。<sup>60)</sup>

シベリア出兵の緒戦が、米騒動中心の紙面を一変させた。前述の、父親が自殺した兵士が戦死したニュースが飛び込んだ。<sup>61)</sup> 『馬関毎日新聞』は、「吾人の期待に副ふた電報」と書いた。山口県出身の兵士にも

戦死者が出た。この戦死者の遺族の言葉は、一家の働き手を失った哀しみに満ちたものである。<sup>(62)</sup>

「私方にも恒人（戦死者の名前―井竿）が主に農業を稼いでみしたので杖とも柱とも頼む彼を失ってからの秋はどうしやうかと思案に暮てみましたが今年の秋は措置モウ永劫に帰らぬ身となりました、然し人間と生れて来てからは必ず一度は死ぬべき身の死所を得て皇国の為に尽す事が出来たかと思へば又其は格別であります」

この前後より宇部時報社は、村民へ慰問袋作成の呼びかけを始めた。<sup>(63)</sup> 共同義会は出征者への慰問金給付、戦地への新聞発送などの措置を決めた。<sup>(64)</sup> こうして「何故か国民一般に少しも油の乗らぬ」出兵へと国民を動員する動きが再び始まったのである。

### 小括

下関と宇部のシベリア出兵の発動、そして米騒動の光景は容易に普遍化できない。下関は門司同様、内外との往来があつた。また国際的なニュースも入りやすかつた。また、宇部の米騒動は、いわゆる「対米価値上げ闘争」<sup>(65)</sup> に属している。

下関も宇部も、一二師団の一員としてシベリア出兵に動員された。特に下関には軍隊も駐屯していたため、シベリア出兵は直接に市民の問題として存在した。そして下関市は山口県第一の都市であつた。米騒動の勃発には最も神経を使った場所であつたはずである。当局は「米の買占め」の噂を打ち消し、少人数の集まりも警察力で押え込みを圖つた。地元紙と篤志家による販売も自発的に実行された。そして、結果として県内の米騒動は、宇部と大島郡（この時大島郡は出兵の対象

ではない）という死角で起こつた。双方の地域的特性は全く異なるが、激しいものであつたことは事実である。シベリア出兵と米騒動は、山口県ではここで交差した。蜂起した宇部の坑夫は出征者の家を襲わなかつた。逆に、大島郡の米騒動を取材した『宇部時報』の記者は、住民からシベリア出兵について「イラヌ喧嘩を買つたものですナ」と言われた。<sup>(67)</sup> シベリア出兵については、批判的無関心と、出征者への同情が混在していた可能性は指摘できるのではないか。鎮圧の兵士に抗議し、出征に無関心でも、出征者の家族は同情できるのである。

ただし、山口県の場合、県庁所在地で米騒動は阻止された。<sup>(68)</sup> そして、地方紙は決して米騒動に同情しなかつた。新聞は陰謀論、差別や偏見をも動員した。施米が出れば受けられないように書き、宇部では坑夫への抑圧が主張された。出征者への社会的ケアと、硬軟取り混ぜた労働者鎮圧策は効を奏した。この時作られた「報徳会」は、のちに宇部の労働組合を崩壊させることに成功している。<sup>(69)</sup>

そして、宇部の米騒動を鎮圧した山口四二連隊は、翌年シベリア出兵に動員されることになる。このことについては、稿を改める必要がある。

### 注

(1) 拙著『初期シベリア出兵の研究』九州大学出版会、二〇〇三年。福岡の例を挙げている。

(2) 『関門日日新聞』『馬関毎日新聞』は、山口県立山口図書館所蔵のコピーを用いた。新聞の党派などについては、戸島昭「大正昭和期山口県下の新聞紙発行状況」『山口県文書館研究紀要』一一号、一九八四年を参考にした。下関市にはもう一つ、『関門報知新聞』という新聞が存在したが、これは未見。

(3) 『黒龍河畔の犠牲者』『馬関毎日新聞』一九一八年四月五日。以後

は、「一九一八年」を省く。

(4)「労兵本部」『馬関毎日新聞』八月二日。

(5)「全露国民の絶叫」『関門日日新聞』六月一八日付夕刊に登場しているのは、シベリアから戻ってきた陸軍軍人中島正武である。中島は、日本の「シベリア独立」工作の密命を受けて奔走していた人物である。このことについては、原暉之『シベリア出兵』筑摩書房、一九八九年を参照のこと。また、日本人の避難民を連れて帰国した男のインタビューも掲載された(「ニコライスク帰客談」六月二五日朝刊)。この人物は、当初「山縣熊男」と掲載されたが、後の記事で「佐藤熊男」という名前が明らかになる。佐藤熊男は後にシベリア出兵で日本の宣伝工作に従事した(前掲拙著)。

(6)「編輯局より」『馬関毎日新聞』五月三〇日。

(7)「西伯利亞安危 救援を断ぜよ」『関門日日新聞』六月八日朝刊。

(8)「東京より」『馬関毎日新聞』七月二二日。

(9)「チェック軍 憐れむべき中欧の弱小民族」『関門日日新聞』六月二六日朝刊。ちなみに『馬関毎日新聞』は八月の終わりになってから解説を連載した。

(10)『馬関毎日新聞』の当該時期の報道を参照。市会の意見書は、八月二日付の紙面。『関門日日新聞』八月二九日付夕刊によると、義捐金は同社だけで八四七五円余り集まったという。

(11)例えば「首途の人、送る人」関門棧橋、唐戸棧橋が写っている。

『関門日日新聞』八月六日夕刊。

(12)「動く旗影―勇める人々」『馬関毎日新聞』八月六日。逆に、芸妓に千人針を頼んだら「エイ蒼蠅いなア」と袖を振り払われた、という事件も掲載されている。コラム「東西南北」八月九日。シベリア出兵は、関係ない人には黙殺される雰囲気があった可能性を示唆させる。

(13)「勇ましき首途 裏面に潜む哀話」『関門日日新聞』八月七日夕刊。しかし、「安心するようには」と憲兵が説諭しただけだったという。

(14)「万歳の裏の哀話」『関門日日新聞』八月八日付夕刊。

(15)むろん、当局もなにもしていないわけではない。『西密大日記』大正七年二冊(九月)では、東京府の出征軍人家族対策の書類が綴じ込まれている(「出征応召軍人家族後援救護ニ関スル件報告」)。それでも、やはり公的なケアが充分ではなかったのである。

(16)「病父見事に自殺し〇〇する我子を励ます」『関門日日新聞』八月一日付夕刊。「身を殺して我子の出征を励ます」『馬関毎日新聞』八月一日。「自分の自殺は国家のため」という遺書があったという。

(17)「軍隊宿舎割当」『関門日日新聞』八月八日付夕刊。「出征軍隊ニ対スル衛生上ノ取締並舎主ノ待遇等ニ関スル状況ノ件報告」(大正七年九月十八日)『西伯利亞出兵ニ於ケル憲兵報告』(防衛研究所所蔵)は、広島島の例を取り上げている。その中では、自宅の模様替えを装って畳をはがし、庭石を掘り返してまで宿営を拒んだ例や、在郷軍人将校が「ここは将校の家だ」と拒絶したなどという例を報告している。

(18)「矛盾撞着を極むる陸軍当局と記事差止命令」『馬関毎日新聞』八月一日。「新聞取締ニ関スル件」『西密受大日記』大正七年二冊(九月)(防衛研究所所蔵)にも、この面で各地でトラブルがあったことを書いている。「師団ヲ陸軍省ノ代表機関タル如ク誤解」があった結果取締りを受けた新聞社があった、という。

(19)「白米商も溢す」『関門日日新聞』八月九日付夕刊。

(20)「軍用米と米価 買占めを為さず」『馬関毎日新聞』八月一三日。富山の米騒動が既に早い段階からあったことについては、米騒動史研究会北陸支部「米騒動の日付修正と『米騒動の研究』」(細川資

料』の限界」『歴史評論』四五九号、一九八八年。

(21)『山口県警察史』上巻、一九七八年、六九三―六九四頁。

(22)『三新聞社の旗を押し樹てて外米の安売』『馬関毎日新聞』八月一日。

(23)コラム「筆の雫」『馬関毎日新聞』八月一日。

(24)井上清・渡部徹編『米騒動の研究』第四巻所収。有斐閣、一九六一年。

(25)高野義祐「新川から宇部へ」ウベニチ新聞社、一九五三年。「宇部の米騒動」『長周新聞』一九五五年五月二十五日号―九月二十五日号。

『米騒動記』米騒動四十周年記念刊行会、一九五九年。「米騒動―その六十年を回顧して―」『宇部地方史研究』七号、一九七八年。特に『米騒動記』は、安保改定前夜の緊迫した空気の中で書かれたものであり、同時代的な問題意識が前面に出ている。

(26)日野綏彦「宇部の米騒動」『宇部地方史研究』一二号、一九八四年。『宇部時報』は、戸島昭、前掲「大正昭和期山口県下の新聞紙発行状況」によれば政友会系新聞。一九一二年に創刊した。一九一八年六月から、プランケット判に紙面を拡大した。当時は週刊新聞であった。筆者は宇部市立図書館に所蔵されているコピーを参照した。

(27)『宇部市史』通史篇下巻、一九九三年。

(28)「地方改良会の精神」『宇部時報』七月七日号。

(29)「金一升米一升」『宇部時報』八月四日号。

(30)「険悪な思想」『宇部時報』八月一日号。「時事管見」という短いコラム集の一つ。

(31)「試練の時期に入る」『宇部時報』八月一日号。

(32)「送出征軍人」『宇部時報』八月一日号。「時事管見」の一つ。

(33)「小説よりも美しき軍国の華」『宇部時報』八月一日号。

(34)「共同義会之美拳」『馬関毎日新聞』八月一日。

(35)『山口県報』大正七年八月一日号。

(36)この過程については、弓削達勝編著『素行渡邊祐策翁』（乾）、渡邊翁記念事業委員会、一九三六年、また、『米寿紀藤閑之介翁』紀藤閑之介米寿祝賀記念会、一九五七年を参照した。

(37)前掲『素行渡邊祐策翁』四六一頁は、坑夫側の要求が拒絶されたために米騒動が起こったのではない、という。だが、高野、前掲『米騒動記』は、経営側は米の廉売券の交付は言ったが、賃上げは経営者団体との交渉次第としてなにも答えていない、と書く。

(38)『山口県警察史』上巻、六九七頁。

(39)このプロセスは、基本的に高野、前掲『米騒動記』に負っている。史料引用は、後に書かれた新聞記事「宇部の大不祥事」『宇部時報』八月二日号。奇妙なことに、渡邊邸の破壊の程度を、当事者（前掲『素行渡邊祐策翁』）も警察（「本県警察部長談」『宇部時報』八月二日号）もしきりと軽く見せようとしている。だが、病身の渡邊は身の危険を感じて避難したほどのものであった。

(40)日野、前掲「宇部の米騒動」。また『馬関毎日新聞』八月二日のコラム「東西南北」には、「出征軍人留守宅」という貼り紙を「暴動除けの御守り札」として貼っている米屋が下関市内にもあったことを伝えている。また、原田一雄「米騒動の思い出」『宇部地方史研究』一九号、一九九一年は、若干の思い違いはあるものの、このときの証言記録として貴重である。坑夫側の行動は、牧原憲夫「客分と国民のあいだ」吉川弘文館、一九九八年が指摘する、近世末期の米騒動の行動に酷似している。

(41)前掲『米騒動記』。高野、前掲「新川から宇部へ」では、兵士が演習帰りの直後で疲労していたところに、坑夫が挑発的な行動を繰り返したことも指摘している（当時の新聞にもある）。

- (42) 前掲『米騒動の研究』第四巻。この事実は、下関の新聞に載らなかった。
- (43) 「流言蜚語に迷ふな」『関門日日新聞』八月一九日付夕刊。
- (44) 「知事の訓令」『関門日日新聞』八月二一日付夕刊。
- (45) 『山口県警察史』上巻、七〇一頁。
- (46) 『宇部市史』史料編下巻、一九九〇年、九〇九—九一〇頁。
- (47) 「暴動の与たる炭界の打撃」『宇部時報』八月二一日号。
- (48) 「時局軍事談」『関門日日新聞』八月二三日付夕刊。
- (49) 「宇部暴動」『馬関毎日新聞』八月二二日。
- (50) 「斯の乱臣賊子」『馬関毎日新聞』八月二二日。
- (51) コラム「支那と同じ」『関門日日新聞』八月一九日付夕刊。
- (52) 「銃声の前後」『宇部時報』八月二五日。
- (53) 『馬関毎日新聞』の八月二四日、三〇日のコラム「筆の雫」。「宇部時報」八月二二日の「米擾動の側面観」、二五日の「須らく根本を断て」。渡部徹・藤野豊編『近代部落史資料集成』第七巻、一九八五年、三一—書房が示しているように、被差別部落住民の煽動説はデマだった。
- (54) 「時事管見」『宇部時報』九月一五日。この時は長文の論説。
- (55) コラム「経済的援助」『関門日日新聞』八月二一日付夕刊。
- (56) 下関市長の発言は「恩賜米は天長節に」『馬関毎日新聞』八月三一日。川中村は、「裕福な川中村民」『関門日日新聞』八月二四日付夕刊。ところがこの記事は川中村長名で正式に取消を求められた(八月二八日夕刊)。
- (57) 「販売に関する一説」『宇部時報』九月一日号。宇部村の隣り、吉敷郡西岐波村では、役場の救済を拒絶した村民がいたことが分かっている(前掲『宇部市史』史料編下巻、九一二頁)。
- (58) 「宇部教育会の席上所観」『宇部時報』九月一五日号。高野、前掲『米騒動記』の序文が、逮捕者への呼びかけで締めくくられていることは印象的である。第二次大戦後も米騒動のショックは消えていなかったのである。
- (59) 日野、前掲「宇部の米騒動」。
- (60) 前掲『素行渡邊祐策翁』四八九頁。
- (61) 「異郷に花と散る」『馬関毎日新聞』八月三一日。
- (62) 「県下初の戦死者」『関門日日新聞』八月三〇日夕刊。
- (63) 「慰問袋の用意は」『宇部時報』九月一日号。
- (64) 「出征軍人慰問」『宇部時報』九月一日。「戦時中の共同議会(ママ)」『宇部時報』九月二二日。
- (65) 「国民の油が乗らぬ」『関門日日新聞』八月三〇日朝刊。在郷軍人会理事、長沼秀文中将の発言。
- (66) 井本三夫「日本近代米騒動の複合性と朝鮮・中国における運動」『歴史評論』四五九号、一九八八年。このことは、前掲『山口県警察史』にもあるように、同時代の警察は見抜いていた。
- (67) 「大島郡行」『宇部時報』九月一日号。
- (68) 末廣要和「福井米騒動の地域変革」前掲『歴史評論』四五九号にあるように、福井県の米騒動は現職県知事を辞任に追い込んでいく。
- (69) 戸島昭「宇部達聡会について(二)」『宇部地方史研究』三号、一九七四年。

(日本の政治・比較政治論専攻)